

ウミガメの当たり年？

岸本浩和



図1. 三保飛行場付近に打ち上がったアオウミガメ幼体
腸から出てきた内容物が周囲に散乱していた

定年退職してからは健康維持のために三保半島の浜辺で早朝散歩をしながら、ついでに打ち上げ生物を発見することを楽しみにしています。駿河湾奥部の沿岸には深海生物が打ち上げられることが大きな特徴であることは本誌でも久保田 正さんと佐藤 武さんが連載記事で紹介されています。それらが衰弱して打ち上がる自然的な原因についてはいくつかの考察論文を目にしますが、納得のゆく回答は見当たりません。むしろサクラエビ漁という本湾特有の漁業で混獲されて投棄された深海生物が、遺体となって漂着するという人為的要因が少なくないものと思われます。

さらに、河川管理の際に流出したであろう川藻に随伴して大量に流れてきたアメリカザリガニ、まれにはジャンボタニシにも出くわしました。イヌ・ネコやタヌキは交通事故死などの河川投棄と考えられます。一方、頻繁にみられる海鳥の遺体の多くは死因が想像できません。時には釣り糸が絡んでいることがあって人為的要因と危惧されることもあります。ハシボソミズナギドリの幼鳥が黒潮流域沿岸に大量漂着することが知られています。これこそ自然なサイクルで起こる(岡奈理子, 2011) 不思議な現象のようで、今年はその当たり年でした。ところが、今年がウミガメの当たり年でもあったようです。

2016年の8月13日に三保飛行場のそばで、甲長36cm、甲幅31cmのアオウミガメ幼体が相当腐敗した状態で発見されましたが、体に欠落部位は見当たりませんでした。その4日後には甲長67cm、甲幅62cmのアカウミガメの成体と思われる遺体が発見されましたが、頭部と



図2. 三保沿岸を漂流するアカウミガメ成体
潮流と波によって漂流・漂着を繰り返していた

四肢は欠落し、肩甲骨らしき骨が露出していました。首のあたりから内臓が引き出され、カラスやトビの標的になっていました。近くには先日のアオウミガメが干からびて残っているのですが、鳥につつかれる様子はありませんでした。

2ヶ月たった10月11日にはまたもや甲長40cmのアオウミガメが顔など一部の鱗が剥がれただけの状態で打ち上がっていました(後日、NPOの三宅隆さんが回収して剥製標本として保存)。しかし、脇腹付近から腸管が引き出され、見かけ上“馬糞”のような内容物が周囲に散乱していました(図1)。その1週間後には甲長約70cmのアカウミガメ成体が全く無傷の状態に漂流しながら、時には打ち上がりそうにもなりました(図2)。翌日も三保半島先端(真崎)まで搜索したのですがどこにも漂着していませんでした。アオウミガメは幼体が、アカウミガメは成体が斃死する原因は何でしょう? 後者には関連しそうな現象が過去にありました。

2014年6月29日に甲長42cm、甲幅35cmのアオウミガメの腐敗した幼体が発見され、その10日後、7月9日には三保飛行場そばの浜辺に亀の卵2つが転がっており、一方はカラスにつつかれていました。市役所の担当部署の方と一っしょに付近を見回り、さらに7卵がみつかったアカウミガメ卵と推定されました。つまり、産卵場の北限近くの砂利浜では適当な産卵場所が見つからなくて、我慢できずに放卵したのでしょう。そんな母亀の行く末を考えると死亡の要因になるかもしれません。もし、遺体が発見できていたら、3回ともアオウミガメ幼体の斃死が先駆けて起こっていたのは単なる偶然でしょうか?